

## 優しさという言葉で表さない優しさを持ちたい

(原文)

吉田 真理 (16 歳)

埼玉県

浦和明の星女子高等学校

私は少し引っ込み思案なところがある。それは、優しさを実践するには難しい欠点である。困っている人に対して、手助けをしたいと思っても、それを実践するために大きな勇気が必要となる。声を掛け、何を手助けすればよいかを判断し、実践する。「ありがとう」と感謝されることにも照れや恥じらいが生じてしまう。それはきっと、周りから偽善者と思われたくない、周りから注目されたくないという思いがあるからだろう。臆せず優しさを実践できる人がやればよい、という自分勝手な考えを持つて人ばかりが増えてしまったら、殺伐とした世の中になってしまい、優しさにあふれる社会をつくり出すことはできない。しかし、私のように優しさを実践したいと思ってもできずにもどかしい思いをしている人はたくさんいると思う。

それなら、優しさの捉え方を変えてみようと考えた。そもそも優しさとは、「他人に対して思いやりがあり、情がこまやかであること」と意味している。行いに対して思いやりを持って対応したものであったなら、それは優しさと言えることになる。実践したことも、そこに思いやりが存在しているなら優しさである。周りから優しさを持った行為と思われなくても、周りから感謝されなくても、思いやりを思っていたことであれば、それは優しさだといえる。これなら引っ込み思案の私にもたやすく実践できる。

そこで、手始めに簡単なことから意識してみた。私は登校中の荷物が多い。両肩にバッグを掛けて歩いている。自分が楽な体勢から、両肩に掛けているが、3人分の幅を取ってしまっている。重さにかまけて何も考えずに歩いていたが、エスカレーターに乗る時には、荷物が前後になるように体を横にしたり、道を歩いている時は、自転車や早歩きの人々の気配を感じたら、ぶつかることなく抜かしてもらえるように内側の手にバッグを持ち変えるなどして、なるべく幅を取らないような荷物の持ち方してみた。これは、自分以外の道を利用している人への思いやりを持って行った優しさであり、相手は私からの優しさで認識することはなく、感謝されることもない。この小さな優しさは、荷物にぶつかり嫌な思いをすることがなく、抜かせずイライラすることもなくなる。

言葉には大きな力がある。それは、良い力と悪い力がある。良い言葉は人を幸せな気持ちにするが、悪い言葉は嫌悪感を抱かせる。人が会話をしている時、自分勝手な話題になってしまったり、相手にとって不快な言葉を投げかけてしまったりすることがある。他愛ない会話であっても、自分だけが楽しむ

時間になってしまっはいけない。同じ空間にいるすべての人達が楽しいと感じる会話をするのが大切だと思う。それには、そこにいる相手に興味を持ち、良い力を持っている言葉で会話をするのが理想的である。言葉を発する前や会話をしている最中に、これを言ったら相手はどう思うだろうか、ということを考えながら会話をするように心掛ける。普段のすべての会話をそれですることは難しいが、相手を思いやる優しさを持ちながら会話をしていきたい。

私が実践した優しさは、とても些細なことであり、微力なことかもしれない。しかし、私がこれからも実践していきたいと思う優しさはこういうことである。この小さな優しさが人それぞれ違うものであって、それぞれの人がその小さな優しさを実践したら、とても大きな優しさになると思う。小さな優しさがあふれる社会は、それによって小さな無関心や冷淡が減少し、小さな優しさが積もっていくことによって大きな優しさにつながっていくことになると思う。私の中に小さくても人を思いやって行動をしたという意識が生じるように、沢山の人が同じような意識を持つことで、優しさ溢れる社会をつくることは実現すると思う。